

保存の はなしをしよう。

19 あらためて、感謝を。

保存環境をよく保とうとするとき、なくてはならない道具があります。この「保存のはなしをしよう。」の第1回目にご紹介した、「自記式温湿度計」もそのひとつです。髪の毛が湿度によって、伸びたり縮んだりする性質、金属が温度によって伸びたり縮んだりする性質を使った、たいへんシンプルな仕組みを持っています。とてもわかりやすい！とびっくりするくらいです。展示室などで、監視員のみなさんも気をつけて見ていて、変化があれば連絡をくれます。こうして、館内の人が全員で、文化財の保存環境に関心を持つことを、当館では保存事業の重要な柱にしています。

自記式温湿度計のような機器や、文化財保存のジャンルで日々使っている資材を製造している企業は、いずれもその業界をリードする企業です。長い間に蓄積してきた知識が貴重で、新しい製品開発にも積極的です。そのような企業が、顧客が多くない文化財保存のジャンルで求められている製品については、企業の社会貢献として開発し、製造しています。しかし社内の風土が変化したり、部品を供給する会社が動けなくなったりすると、製造がされなくなることもあるでしょう。これがなくなったらどうするか、をつねに考えることも、文化財保存を進めるうえで大切なことなのかもしれません。

温湿度計で言えば、現在では、自動的にデータを採取・記録する機械「データロガー」があります。これは、コンピューターなどにアプリケーションソフトをいれて、データを読み取っていく必要があります。その情報を、スタッフの全員が共有することは今より難しくなるでしょう。そのためだと思われるが、データロガーを使っている、アナログな自記式

温湿度計と併用している博物館施設をよく見ます。

個人的には、外部に電源がいらず、つまり停電でも動き、メンテナンスが簡単で、仕組みが単純である機器に対する愛着がありますが、いずれは変えていかなければならないのかもしれない。できれば、ずっとあってほしいのです。データは同じ取り方で採取すると、比較が簡単で使いやすくなります。いまのところは、「大事に使おう」と言っています。取り扱いが丁寧であれば、道具の寿命は延びます。

温湿度計だけでなく、文化財の保存修復分野で必要な機材・資材は、もともと文化財保存用として作られていたものは多くありません。私の道具袋を見ても、「文化財保存用」として作られ、売られていたものは、見事なまでにありませんでした。修復家の方々や尊敬する同業者が使っているものを見て同じものを買うか、これなら安全に使えるのではないかなと思うものをいくつかの店を回って探してそろえています。ほんとうに、文化財保存というジャンルは需要が小さいのだと実感します。

しかし、それでもこのような小さな需要に応えようとしている企業があり、その努力が報われることが、豊かな社会の証ではないかと思えます。経済的な面でも、厳しい話が続いているこのころ、現場の人間としてあらためて感謝したいと思います。(植野比佐見)



おぼえていらっしゃいますか、お久しぶりです、自記式温湿度計です。道具袋です。さまざまな場面にあわせて、かなり厳選されているのです。

MUSEUM CALENDAR

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで)
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

2022.2.5(土)～3.27(日)

20世紀からおみやげ。近現代美術のたのしみ

20世紀に生み出された美術作品に反映された100年の歴史、新しい素材や新しい技術が表現にもたらした変化などのなかから、11の視点を提案します。新しい世紀のはじめから少し時間を経たいま、美術作品を20世紀の人々が残してくれた「おみやげ」として、見直してみましよう。

三島喜美代《パッケージ》1974年 当館蔵



2022.2.8(火)～4.17(日)

コレクション展 2022-冬春
特集: 若き日の野長瀬晩花

当館のコレクションをテーマごとに紹介するとともに、特集として、1918(大正7)年に京都で国画創作協会を創立し、斬新な日本画を発表した野長瀬晩花の若き日の活動を、作品とともに、画塾での学習を物語る写生や模写、アルバムなどの旧蔵資料を通して紹介します。

野長瀬晩花《都をどり》1917年頃 当館蔵



メールマガジン Facebook Twitter ご案内

メールマガジンでは展示会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や Twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展示会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展示会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアパローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円 学生会員 3,000円
ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当: 中川

MOMA Wakayama news

2022 n°109





あなたとわたしとだれかのために展覧会を考える

コミュニケーションの部屋

2021年8月15日—10月10日

前川による映像作品のほか、那須と協働した陶芸、色紙による造形など、「アートリンク・プロジェクト」での一連の創作物を記録写真や資料とともに並べた Room 5

のなかのひとつに、ふたりの男性が建物の屋上から塀越しにあちら側を見て、不思議な動きをしている映像作品があり、なぜだか私は強い興味を抱きました。見ているうちにそれが彼らの目に映る景色（おそらく学校の校庭にいる子どもたちがスポーツをしている様子）のなかから、それぞれ勝手に誰かを選んでまわっているのだと気づきました。その作品について会場で作家と話したことや、後に別のグループ展で独立した作品として発表されているのを見たこともあって、強く記憶に残っていました。

この作品に思い至ったのは、「同じ光景を見ているようで、どこかズレている」「噛み合わないようで、同じ呼吸で同じ空間を共有している」、そうしたふたりの様子が見ていてとても心地よく感じられたからでしょう。つまり展覧会という場所で私たちが作品を前にする行為とこの作品には通じる部分があると感じたのです。そこでコレクションによる企画展の枠組みではあるものの、また作家にとっては新作発表の機会にもなりません、ぜひ紹介させてもらいたいと、久しぶりにその作家に連絡をとりました。それが展覧会の最後のコーナーで紹介した《風景に同期する》(表紙上)という映像作品で、今回ご協力いただいた前川紘士さんです。

映像作品をきっかけにお声かけしましたが、その後、何度もやりとりを重ねて相談するなかで、最終的には映像作品を独立させるのではなく、一連の「D50の時間」と題したプロジェクトの総体として紹介することになりました。そのプロジェクトの中身については次稿で前川さんご自身に記していただきましたので、ここでは展覧会全体の構成と、そのなかでの「D50の時間」の位置づけについて記しておきたいと思います。

今回の展覧会で、(少なくとも私にとって)はじめて試みたことがあります。それは「わたし」という存在を表に出したことです。展覧会の企画者は、内容を考え、作品を選び、解説を書き、展覧会という場を準備しますが、その主体が作家自身でない限り、あまり表に出ることはありません。語るべきは作品であり、また来館者は多様であることから、伝える内容やその方法にあまり偏りがなく、できるだけニュートラルに、あるいは客観的に語るのが展示の基本だと言えるかもしれません。



Room 1にはこの展覧会のポスターも展示し、キャプションには「展覧会の名前はわたしからあなたへの最初のことば」と記した



Room3では君平の《7.62MM 7色入》を部屋の中心に、周囲には虹色と戦争が主題となる作品を両極に、作品を連ねて配置した



視線への意識や画家とモデルの関係を手がかりに、作品を「見る」行為を、視点を重ね合わせることも捉えた Room 2



Room 4では、わからない/わかりあえないことに関わる作品に加え、読み違いやズレをテーマにした作品を多く展示した

けれども展覧会場に足を運んでくださる方は十把一絡げの大多数ではなく、一人ひとり別の「個人」であることに鑑みれば、そこで生まれる企画者と来館者の関係は対一を基本とします。そのことを意識してもらうために、展覧会のなかに記す言葉はすべて、企画者である「わたし」から来館者である「あなた」に向けたコミュニケーションと捉えて綴ることにしました。展示室は5つに分け、以下のテーマに沿う作品を介しながら、「わたし」が「あなた」との対話を試みたのが、この展覧会です。

Room 1：伝えること(ば)／伝わらないこと(ば)

Room 2：見る／見られる

Room 3：ともに見ること——あなた/だれか

Room 4：デイス/コミュニケーションの部屋

Room 5：協働の向こうがわ

これら5つのテーマは順に、コミュニケーションの深まりを想定して組み立てたものです。最初の2部屋では、展示室で作品を見る行為を分解して、考えることにしました。まず「Room 1：伝えること(ば)／伝わらないこと(ば)」では言葉と事柄を重ね合わせて表現しましたが、展覧会で何かを伝えようとするとき、企画者である「わたし」は言葉を第一の手段とします。作品のなかに表された言葉や文字、あるいは書くというという行為には、作り出すことの根源的欲求と、相手であれ未来の自分であれ、何かを伝えようとする意思が横たわっているでしょう。また「Room 2：見る／見られる」では、作品と対峙することを前提とした展示室の特殊な空間に目を向けましたが、一方で作品を見る行為とは、作者の視線を体験することでもあり、視点を共有する可能性を持っています。

展覧会の真ん中にあたる Room 3では、君平の《7.62MM 7色入》(表紙下)を部屋の中心に配置しました。この作品の材料である7色のオイルパステルと使用済みの葉莢から、「わたし」は虹色と戦争という相反する主題を引き出しました。そしてそれらに合う作品を周囲の壁面の両極に置き、少しずつ推移しつつ次第に重なり合う意味を探して、いくつかの作品を連なるように配置しました。ただしその目的は、こうした「わたし」の意図を読む

*この展覧会は、当館ウェブサイトに設けた特設ページ「MOMAW 360」で、360°ウォークスルービューでご覧いただけます。https://www.momaw.jp/momaw360/

み取ってもらうことではなく、ひとつの作品から思い巡らすことは自分以外のだれかとは異なっているという可能性を示すことでした。実際、展示期間中に来館者と話をするなかで、最初に気づいた素材(オイルパステルか葉莢のどちらか)の方に目を向けてしまうと、もう一方に全く気がつかないことがあるという声を複数聞きました。ならばやはり、作品を通じて自分とは違うだれかの視点を想像することが、展覧会という場で「ともに見ること」の意味でもあるでしょう。

展覧会の後半は「デイス/コミュニケーション」という少々ネガティブな意味に思われる言葉からはじめました。昨今、互いにわかりあえないことや意見を異にすることが、まるで悪いこととされがちですが、ひとつ前の部屋で示したように、自分とは違う意見があることが美術にとっては大前提です。また意思疎通がうまくいかないことや伝えた通りに伝わらないことは、誤解や誤読として美術作品の意味を豊かにする重要な要素でもあります。

きっと人間の営みはすべて、そうしたわかりあえない関係から生まれているはずです。ただしそれを否定的なものとするか、さらにクリエイティブなものにつなげるかは、「わたしたち」次第なのでしょう。そのことを示してくれる活動として、私は今回、「D50の時間」を展覧会の最後の部屋に位置付けました。前川さんと那須大輔さんの協働制作は、噛み合っているようで噛み合っていないところもまた面白さのひとつですが、互いについて知ることや見えないゴールを探し出す過程のなかから、一連の造形物が生まれています。たとえば那須さんが作りたいと言った「カラフルフォトフレーム」とはどのようなものなのか、そもそも那須さんのなかに具体的に思い描くものがあったのかどうかもわかりませんが、ふたりはそのかたちを探り出すために試行錯誤を重ね、さまざまな素材での「カラフルフォトフレーム」を生み出していきました。そうした作るという行為——言葉による「伝える/伝わらない」とは全く異なるコミュニケーション——を通じて、さらにはふたりともが全く知らなかった新たな答えに向かっていくところに、今の時代に必要な、また美術(館)におけるコミュニケーションの手がかりとなる、「協働の向こうがわ」へのヒントを得たように思います。(青木加苗)



「D50の時間」美術の土壌 | 前川紘士(美術家)

「D50の時間」(2011-12)の協働制作の風景(2011年)

きっかけはほぼ1年前、新型コロナの国内第3波の最中、2021年の年明けすぐの学芸員の青木さんからの連絡でした。10年前に参加した「奈良県障害者芸術祭HAPPY SPOT NARA 2011-12」に出していた映像作品「風景に同期する」を、2021年夏に和歌山県立近代美術館で行うコミュニケーションをテーマにした展覧会に出せないか、という相談でした。

この映像は、上記の芸術祭の一企画として行われた「アートリンク・プロジェクト」という枠組みの協働制作の中で作られた作品です。このプロジェクトでは、奈良県内の福祉施設に通う参加希望者と施設外部の芸術家のペアがマッチングを経て合計10組作られ、それぞれが一定期間、協働制作を行いました。そのなかの1ペアとして、奈良市内の福祉施設に通う那須大輔氏(以下、那須くん)と、企画者側から紹介を受けて参加した前川も協働制作を行い、その過程で出来たもののひとつが、画面の左右に立ったふたりの人間が、無言で何かの動きを行い続ける5分ほどの短い映像作品でした。

今回の展覧会への参加自体に関しては、プロジェクトで作った作品の一部の散逸が判明した後だったこともあり、割と早いタイミングで前向きな返答をしました。ただし、当の映像作品だけを一連の協働制作から独立させて出品するのか、それとも他の作品や資料を含めたプロジェクト全体として紹介するのかという選択に関しては当初決まっていませんでした。個人的に改めて振り返り、作品自体やプロジェクト、それと関連する他の活動について青木さんに改めて伝えるなかで、映像作品単体ではなく、それを含んだ「協働制作のプロジェクト全体」=「D50の時間」を軸に紹介することに決めました。

「D50の時間」というのは協働制作の全体につけたタイトルで、制作期間に判明した、那須くんと前川が子どもの頃、偶然にも同じ団地の同じ棟「D50」に住んでいた(!)、というエピソードから付けた名前です。当時私は面識がなかったのですが、私の母と弟が那須くんを覚えており、那須くんの方にも弟の名前を出すと、小学校の集団下校の際に弟と一緒にセイカアワダチソウを相手に遊んでいた、といったことを覚えてくれていました。当初の展示では、協働制作の期間中に作った個別の「様々な作品」と、同

時期にとっていた「メモや記録などの資料」を合わせて展示したのですが、それら全体に対して、ふたりにとって私的で、且つ、象徴的な「D50の時間」というタイトルをつけていました。

その後の2017年にも同芸術祭を振り返る展覧会「HAPPY SPOT FUTURE」が開催され、再展示の機会を得ました。しかし、それまでの5、6年間に作品が一部紛失していたことが判明し、それを受けて、残った粘土作品を施釉・焼成するといった「更新」を試みることになり、そうした新たな出来事の記録や資料も追加して「D50の時間remix」として展示しました。またここでは、協働制作の過程で生まれた「風景に同期する」を、当初の福祉と芸術に関するプロジェクトとは別の活動のなかで展開させた前川個人の作品も合わせて紹介していました。

これらプロジェクトの経緯の紹介や資料の共有を青木さんと進めながら、同時に、今回の展覧会に「どのように」参加するのかについても話めていきました。作品の展示や管理に関してはこれまでも前川の方で整理・調整を行い、那須くんと共有してきたのですが、今回のような「美術館」で展示する場合、どのような関わり方ができるのか。また、展覧会の準備・設営期間と重なる別の予定との実務的な調整も含めて整理していきました。

最終的に、展示プランの方向性として落ち着いたのは「物故作家式」と仮に呼んでみた、作品と関連する資料を可能な限り美術館に預け、作家側は一步後ろへ引く、という方法でした。作家側(前川)は、協働制作の総体を表す「D50の時間」として作品と資料を共に展示すること自体はあらかじめ決め、作品と資料の提供までを行い、展示の詳細や編集の方法、枠組みとなる企画展のなかでの構成は美術館担当学芸員(青木さん)が行う、というかたちです。実際には前川は生きているので、資料の確認、聞き取りや意見のやりとりができますし、青木さんも学芸員として作家の話をしっかり和聞いてくださりましたが、基本方針としては、展示に関しては美術館が作り、事実誤認の訂正やいくつかの連絡など、作家側でないとは不可能な部分に関してのみ前川が動く、と整理して準備を進めました。

ある程度方針が定まったところで、那須くんとご両親に連絡をして、展覧



(左) 2011年の制作風景。各回、やっていることの共有・確認のため、作品を福祉施設内に広げながら次の制作を進める。施設内には日中の活動をしている他の利用者の方やスタッフもいる (中央)「カラフル・フォトフレーム」(2011)。様々な方法、素材を介して協働制作は進められた。那須が作りたと言った「カラフル・フォトフレーム」を2人で同じ紙の上に描いてみたもの。現存せず (右)「風景に同期する」2014年、神戸港の倉庫で開催した自主企画のグループ展「雲の建物」(2014)での展示風景

(左)「D50の時間remix」(2017)の展示風景 (中央)「風景に同期する」(2011) (右)2012年の展示直前の台座制作。ペアのコーディネーター役の施設職員の方が深夜まで付き添ってくださった



会に出品することの確認をしました。前後して、「風景に同期する」「カラフル・フォトフレーム」「ペンギン(父)」そして今回のために唯一追加制作した「ぶどうの思い出」といった作品と共に、2012年や2017年に展示した資料を合わせて美術館に事前搬入。その後、プロジェクトや資料に関する聞き取りや、会期中の関連事業の準備などの打ち合わせをオンラインで行って調整を進め、展覧会オープンを迎えました。9月に予定していたNPO法人和歌山芸術文化支援協会(wacss)さん主催の関連事業、アーティスト・トークとワークショップ「ものまね関係」はデルタ株の影響で会期最後の週末に延期となりましたが、ピークを過ぎた9月頭には会場を訪れて展示を観ることができ、会期後半には、那須くんのご家族とも一緒に会場を回って今回の展示の機会を共有することができました。いくつか記念撮影をして、コロナが落ち着いてからか、あるいはタイミングを見計らってまた何かしよう、といった約束をして別れました。関連事業も無事開催され、約2ヶ月間の展覧会は終了しました。

これまでの「D50の時間」の展示では、協働制作という活動のプロセスを見返す「回路」を作るために、作品と合わせて記録・資料の展示を行ってきました。「出品作家前川」「那須と前川との協働制作」といったかたちで紹介される内容の実際の構成は、プロジェクトのエンジンであるふたりの制作活動が実現するための基盤——様々な調整や企画の構成、運営といった部分、事業や経済的な基盤——によって成り立っていました。制作活動が育つ謂わば「土壌の部分」は、制作のプロセスであれ、展示という共有の場であれ、プロジェクトへの協力者、つまり、福祉施設のコーディネーター、スタッフ、施設、ご両親、学生や友人、企画者、行政(の福祉課)、寮を貸してくれた福祉施設、焼成をサポートしてくれた陶芸作家、などなど、様々なレベルで関わる多くの人や要素の有機的なバランス、あるいは微妙な緊張関係の上で成り立っています。このことは、今回のプロジェクトに限らないあらゆる制作活動に関わる一般的なことでもあります。この協働制作にとっては特に重要なことでした。活動の場のなかでは、色々な「主

体」が、「わたし」や「わたしたち」など様々にかたちを変えて蠢いていて、そこでは何本もの関係の線が引かれ、沢山の集合が何重にも作られては解体されているように感じられます。そのなかで「作品」は色々な動きの結果ぼろりと出てくるあるひとつの要素でしかない、とも言えるし、その「作品」が新しい関係を生み、他の様々な要素を引き寄せることもあります。

今回の美術館の展示では、「作品」を見せるという観点では普段背景として隠れがちなもの「土壌の部分」=「美術における活動の相」について、「資料」を伴うというかたちで、謂わば根っこに土がついた状態で、意識し、考えるための場所に持ち込むことができたのではないかと、思っています。「作品」は地上に出た植物の茎や葉の部分、「資料」は根っこやそこについた土の部分、あるいはそこに示唆される「活動」の一部分でしょうか。土壌となる「活動の全体」をそのまま持つてくることは現実的にはできませんが(あるいは美術館で活動自体を行ってしまえばいいのか)、今回はその「美術における活動の部分」との関係を重視したので、いわゆる「作品」の部分のみではなく、根っこや土にあたる「資料群」までまとめて表に出すこととし、その上で、その根や土の部分の美術館での扱いも含めて青木さんに託すかたちを取りました。「D50の時間」の展示、編集、資料管理の一部を分け持つてもらったことで、美術館の活動と外の活動を結びつける想像力も働きます。

今回、他の様々な作品や鑑賞者と結びつきを持つ可能性のある美術館という場所で、根や土の絡んだ10年前から蠢いているプロジェクトを通して、「美術における活動」についていくつかの面から改めて具体的に考える機会を持つことができました。展覧会が一区切りつき、ある種の清々しさを感じる一方、個人的な振り返りに関しては、色々整理しきれていないと感じる部分も正直まだまだあります。現時点でのノートとして書き付け、今後も那須くんとの約束も含め、個人的な関心をベースに、スケールや領域の如何は問わず活動を行っていくつもりなので、そのなかで今回の経験についても持続的に考えていければと思っています。

2022年2月1日 前川紘士



光とあそぶ 「リヤカメラ」と「かぶるカメラ」
佐藤時啓さんワークショップ報告

リヤカメラ移動中。自転車で牽引する



かぶるカメラでいろんな場所を見てみる

2021年10月30日(日)、31日(土)の2日間にかけて、佐藤時啓(美術家・東京藝術大学教授)さんを講師に迎えたワークショップ「光とあそぶ」を、NPO 和歌山芸術文化支援協会(wacss、以下ワークスと表記)と共同で行いました。戦前日本の写真界で活躍した和歌山市出身の島村逢紅(1890-1944)を中心に紹介した、「和歌山の近現代美術の精華」展の第2部「島村逢紅と日本の近代写真」の関連事業です。

長時間露光やピンホールを通して撮影した写真作品など、カメラや写真撮影の仕組みを用いたプロジェクトで知られる佐藤さんと、ワークス、そして当館とは、これまでもさまざまなプロジェクトを一緒に取り組んできましたが、今回のワークショップでは、その過程で制作された「リヤカメラ」を、再びみんなで体験したいという目論見もありました。^{註1)}

佐藤さんと私たちの最初の出会いは、ワークスが主催し当館も協力する「森のちから」という紀南の森を舞台に展開するアーティスト・イン・レジデンス事業の4回目、2010年に開催した「森のちからIV」に遡ります。このとき田辺市中辺路町近露にて、招聘作家である佐藤さんと共にツリーハウス・カメラを制作しました。これは、木の上に建てられた小屋を大きなカメラ・オブスキュラ(暗い部屋)とした作品で、レンズを通して真っ暗な小屋の壁面に投影される近露の町並みや森を見ることができます。このカメラの仕組みを身体ごと体験するという驚きの装置は、2012年に「森のちからV」にて解体することになったのですが、佐藤さんがその部材から再生したのがリヤカメラです。当館でも2013年にリヤカメラのワークショップを開催し、今回およそ8年ぶりにそれを動かすことになったのです。

ワークショップは、こうした経緯を説明しながら、しかしリヤカーとカメラを組み合わせた赤い乗り物リヤカメラとは何かという謎を残しつつ、始まりました。リヤカメラは、動くカメラ・オブスキュラです。中の座席に進行方向と反対に座り、座った膝の上に白いテーブルが下ろされドアが閉められると真っ暗な暗室になります。煙突のような部分のレンズが捉えた外の景色が鏡によって反転して、白いテーブルに映し出されます。そしてその景色は自転車によって牽引されるリヤカーの動きとともに変化していくのです。

今回はあわせて「かぶるカメラ」にも取り組みました。かぶるカメラは、段ボールと虫メガネ、トレーシングペーパーで作ります。大小ふたつの段ボール箱を準備し、大きい箱には虫メガネをレンズとして取り付け、小さい箱は面を四角く切り取った部分にトレーシングペーパーを貼り付けます。それらを組み合わせて頭にかぶると、トレーシングペーパーの面に、虫メガネレンズから取り込まれた風景が逆さに映り、段ボール箱を前後に動かすことによってピントを調整します。仕組みとしては立派なカメラです。段ボールには色を塗ったり紙を貼りつけたりして、各自が思い思いの顔のあるカメラに仕上げました。

参加者と一緒に展示会も鑑賞し、島村逢紅が使用していたガラス乾板を紹介しました。ワークショップで私たちは、レンズを通して投影された映像を見る体験をしたのですが、かつてのカメラではその映像をガラス乾板に定着させていたこと、さらにガラス乾板に写された映像を紙に焼き付ける、プリントすることで、展示されている写真作品となることなどもお話ししました。

今日ではネガフィルムもすでに使用されず、デジタルカメラやスマートフォンで簡単に撮影でき映像が手に入る時代です。紙にプリントする機会もかなり減っています。しかし、レンズを通して暗闇へと差し込む光を捉えるという今回の体験からは、あらためてみること、うつすことの不思議さに気付かされたのではないのでしょうか。参加していた子どもたちの驚きの声や表情からは、当たり前の中のなかに何か新鮮なものを見つけたときのよこびが感じられました。こうした体験が、美術というもの、そうではないとしてもなにか創造することのきっかけや糧となったらとても嬉しく思います。

和歌山で生まれたリヤカメラは、今回ひとまずの役割を終えて佐藤さんの元に帰って行きましたが、将来的にはまた新たなプロジェクトも実現していきたいと考えています。(奥村一郎)

註)「ようこそ 彫刻の森へ」(2010)、「なつやすみの美術館「みること うつつこと」」(2011)、「なつやすみの美術館3 美術の時間」(2013)、「モノクロームの世界」(2014)などでワークショップや作品展示を行いました。2010年から2013年にかけての取り組みについては、下記をご覧ください。『「もっと、光を」ドキドキ少年撮影隊 ミュージアム編 記録集」2013年7月27日、NPO 法人 和歌山芸術文化支援協会。



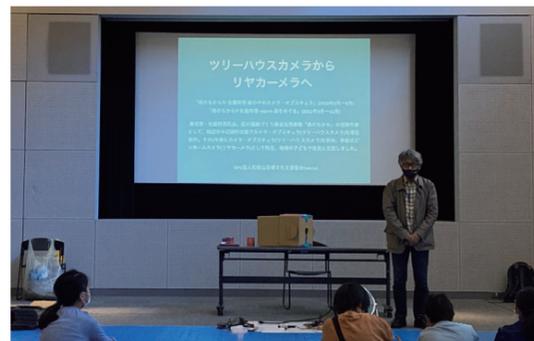
(左) かぶるカメラで見る風景



(中央) リヤカメラ内部の机に映る風景。リヤカーの動きとともに風景も移動する。運転する人の影も見える



(右) リヤカメラに乗る



(左上) ホールにて佐藤時啓さんから話を聞く (右上) 「島村逢紅と日本の近代写真」展示室にて、学芸員が解説



(左下) ツリーハウス・カメラ、田辺市中辺路町長近露にて、2010年 (右下) ツリーハウス・カメラ内部の壁面に映る近露の風景

